

(5) お船祭りにみる歴史的風致

ア はじめに

松本市内の神社には、山車の前後に幕を張り、船のような外観をしたお船を引き回す祭礼が見られます。

お船祭りは、松本市の隣の安曇野市にある穂高神社のものが広く知られていますが、松本市内のお船祭りは、お船の形態や祭礼の内容が異なっています。

お船祭りをを行っている神社は、中心市街地の東側の地区に分布しており、お船の形態や祭礼の内容に共通性が見られます。



お船祭りをを行う神社の分布

イ 歴史的風致を形成する建造物

(ア) 筑摩神社

筑摩神社は、薄川沿いの筑摩に鎮座する古社で、中世に置かれた^{ささげのしょう}捧ノ荘の鎮守として信仰を集め、国府八幡と称され、守護大名の小笠原氏や歴代藩主の厚い崇敬を受けました。また江戸時代には、筑摩・安曇両郡 606社の総社とも言われました。

本殿は、小笠原政康が永享 11 年 (1439) に建築・寄進した三間社流造、檜皮葺の建物で松本地方最古の建造物であり、元和元年 (1616) の修理棟札が残され、重要文化財に指定されています。

拝殿は、入母屋造、こけら葺の建物で、造営棟札から、慶長 15 年 (1610) に建築されたもので、長野県宝に指定されています。また、銅鐘や舞楽面 (以上、松本市重要文化財) も伝えられ、歴史の古さを伝えています。

江戸時代の藩撰地誌『信府統記』に、筑摩村の八幡宮として出ており、松本盆地の開削に係る「犀童伝説」、八幡宮の勧請にあたり 8 つの幡が降ったという「八幡神垂迹伝説」と中房山の鬼族を退治した伝説をあわせて伝えています。『善光寺道名所図会』には、築魔八幡宮として見え、祭神は応神天皇、神功皇后、玉依姫命の 3 柱とされます。



筑摩神社本殿



筑摩神社拝殿

(イ) 須々岐水神社

神社の歴史は古く、貞観9年(867)に従五位下に叙されたことが『日本三代実録』に見えます。また、^{とせんれいすい}兎川靈瑞寺は須々岐水神社の神宮寺であるといい、薄大明神が聖徳太子に告げて兎川靈瑞寺を創建させたとの伝承があります。そのため境内には聖徳太子を祀る桜之宮があります。社宝として長祿2年(1458)の墨書のある木造狛犬や明応10年(1501)作の馬頭観音騎馬像などがあり、その歴史がうかがわれます。

本殿の建築年代は明らかではありませんが、延宝8年(1680)以降の棟札が数多く残っており、宝永年間(1704～1711)には藩主から鳥居が寄進されています。



須々岐水神社の境内図



須々岐水神社

(ロ) 宮原神社

旧村社で、入山辺地区の旧北入村の鎮守です。^{さかのうえのたむらまろ}坂上田村麻呂創建と伝え、境内には本殿、拝殿、神楽殿、お船^{いしどうろう}の船蔵の他、元文3年(1738)の銘文のある石灯籠などがあります。



宮原神社

(ハ) ^{おおわご}大和合神社

旧村社で、弘治元年(1555)の創建と伝わる旧中入村の鎮守です。境内には本殿、拝殿、神楽殿の他、山神社など小社が祀られており、寛政6年(1794)の銘文のある石灯籠があります。御柱は大和合神社だけでなく、境内の小社にも建てられています。



大和合神社

ウ 活動

(ア) 筑摩神社のお船神事

筑摩神社のお船神事は、8月11日の例大祭に、二艘の船が社殿の周囲を3周して

勝ちを競う神事でした。先頭の御幡 33 本、御長柄槍 10 本に続き、30 名ほどがお船を担いで社殿の周囲を 3 周し、鳥居前で終わります。このお船は、木を舟型に組み、ケヤキの青い葉を飾り付け、古面をかぶせた人形 3 体を載せたものです。

現在、お船は担ぎ手不足のため昭和 36 年 (1961) から小型のお船を作り、筑摩・筑摩東両町会の子供たちが担いで社殿の周囲を 3 周しています。



筑摩神社のお船神事

『信府統記』によれば、江戸時代には、祭礼は 6 月 11 日に行われ、祭礼には目付け役の代官の他、警護の同心や足軽が藩主から遣わされたとあります。松平直政以降、歴代城主より「八幡宮」の文字を書した小旗が、合計 65 本寄進されています。

筑摩村と林村で 1 基ずつ船を造り、筑摩村の船は本町の氏子が、林村の船は東町の氏子が担いでいます。先の 65 本の幡は中町の氏子が持っています。筑摩村にありながら、氏子の範囲は城下の親町三町と社殿を寄進した小笠原氏の旧城下である林村に及んでいることがわかります。

『信府統記』からはこれ以上の祭礼の様子は不明ですが、文政 8 年 (1825) の「書上帳」によれば、戸田氏の時代も城主が代わるたびに、小幡 10 本の寄進が続いています。また、船にはそれぞれ 3 つの人形が乗ったとあります。

『善光寺道名所図会』には、築魔八幡宮として見え、6 月 11 日の神事を悪魔降伏の神祭といい、「作り舟といふは、舟の形をさまざまの美服にて粧ひ、人夫三十人にて釣り本社を三度走り廻る事速なり。(中略) 先舟の飾りは八幡太郎、次舟は高砂の尉じょうと姥うばなり。」と記し、その面の図を掲げています。それによれば、先舟には八幡太郎と従者 2 人、次舟には高砂の尉・姥と阿曾の宮神主の人形が乗ったことが分かります。船の両端は着物で飾られていたようで、これは安曇野市の穂高神社のお船祭りに通じるものがあります。

(1) 里山辺のお船祭り

薄川流域の里山辺に鎮座する須々岐水神社では、5 月 4、5 日の例大祭にお船祭りが行われています。享保 11 年 (1726) 戸田氏の再入封のときの差出「薄すすきのみや宮大明神例祭作法次第」にお船曳航すずまべの記録が見えます。

須々岐水神社は、里山家村さとやまべの鎮守ですが、寛永年間 (1623~44) の分村により 7 か村となり、江戸時代後期には藤井村と合わせ「八カはっか」の祭りと呼ばれ、6 月 16 日にお船祭りが行われてきました。

お船は、大正 11 年 (1922) に荒町から分かれた西荒町が新造し、現在は 9 基となっています。お船が分村 (区) するごとに増えてきたことがわかります。

西荒町以外のお船はいずれも江戸時代の建造で、最も古いものは新井のお船の明和6年（1769）です。江戸後期から末期にかけて造られたもので、多くは諏訪の立川流の手によるものです。いずれのお船も見事な彫刻が施され、江戸時代のこの地区がいかに豊かだったかがうかがわれます。また、薄町に残るお船建造に関する江戸時代の史料から、10年間にわたって資金を積み立ててようやく建造にこぎつけたことがわかっており、当時の人々のお船祭りに寄せる思いがうかがえます。9基の華麗なお船は長野県宝に指定されています。

お船の構造は、二階造のお船に舵棒を左右につけ、横木をはめて引き出すようにし、お船の前後にはめた木枠に、色彩や図柄のある幕を船のように張り巡らします。

上金井のお船（天保6年（1835）建造）は、作者は不明ですが、2階部分の柱に巻きつく龍の彫刻が見事で、9基の中で唯一源義経の人物が乗ります。

荒町のお船（明和4年（1767）建造）は明治の改築で、立川流の彫刻師である立川東溪が彫った2階勾欄を四隅で支える力神の彫刻と、1階窓部分に彫り描かれた4枚の大判彫刻は見事で異彩を放っています。

5月4、5日に行われる須々岐水神社のお船祭は、4日のお船作りから始まります。船倉から出した木造二階造のお船に、舵棒を左右につけ、横木をはめて、ひきだすようにします。お船の前後にはめた木枠に、色彩や図柄のある幕を船のように張り巡らします。飾り付けが終ると、お船を町内に引き回している町会が多くあります。

5日の本祭は、若い衆や町会の人々が、太鼓や鈴の合図でお船に集まり、午前8時頃に各町会を出発します。お船の2階に立つ若い衆が、4名で「よいさ、ほいさ」のかけ声で手を振り、お船の前後の舵棒に10数人ずつの若い衆が付き掛け声をかけ、梶子棒を持った若い衆が左右の一对の車輪を梶子で動かし、お船を前後左右にゆら



薄町のお船



上金井のお船



荒町のお船の彫刻



参道口に勢ぞろいしたお船

しながら蛇行させて進めます。

各町会のお船は、須々岐水神社参道口に決められた順に並びます。須々岐水神社があり、宮本と呼ばれる薄町のお船が先頭で、湯の原、新井、下金井、荒町、西荒町、上金井、藤井、兔川寺の順で、午前10時までに勢ぞろいします。

勢ぞろいしたお船は、薄町のお船を先頭に参道を蛇行しながら進み、午前11時までに神社の鳥居前まで進みます。お船が境内に入る前に、若い衆が鳥居の前で神主からお祓いを受けたのち、鳥居から拝殿に向けてお船が曳き込まれます。お船の曳き手は掛け声をかけながら勢いをつけて鳥居をくぐり、そのまま境内を蛇行して進みます。華麗なお船が勢いよく曳き込まれる勇壮な様に、観客からは大きな拍手が送られます。

拝殿についてお船は順番に並べられ、町会ごとに境内に集まって昼食となり、お神酒をいただいて直会をします。

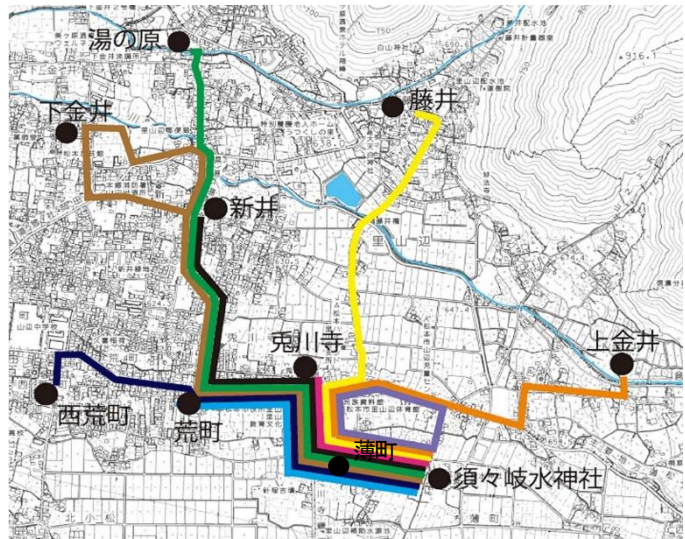
午後の浦安の舞が終わると、弊束へいそくをつけて輿に乗った御神馬像を神主がお祓いします。この御神馬像は、年番の町会の若い衆が担って、掛け声をかけながら神主の家まで運びます。その後、薄町のお船から順番に拝殿前に進み、船首を正面にしてお祓いを受け、拝殿前でお船を前後左右に大きく揺らしながら境内を進み、鳥居を出て各町会に戻ります。

(ウ) 入山辺のお船

須々岐水神社のある里山辺地区の上流域にあたる入山辺地区の宮原神社、大和合神社も4月29日の例大祭にお船が曳かれています。

宮原神社のお船は舟付・宮原集落の1基です。祭礼の起源やお船の建造年代は不明ですが、船庫の梁には明治16年(1883)の墨書があります。

例大祭の前日の4月28日に、神社の境内にある船蔵からお船が出され、組立てと飾付けが行われます。29日の例大祭の日の午後、拝殿で神事が行われた後、お船は神楽殿下の道路に曳き出され、そこで神官のお祓いを受けます。お祓いを受けたお船に子供を乗せ、神社周辺を宮原集落側と舟付集落に曳き回して神社に戻り、祭礼



須々岐水神社のお船祭り お船曳航ルート



境内を進むお船 (湯の原)

が終わります。戦前は境内でもお船を曳き回していましたが、現在は行われていません。

大和合神社のお船は、大和合、薄川左岸の一ノ海、右岸の厩所の3基があります。お船の起源は明らかではありませんが、大和合神社のお船は、昭和39年(1964)刊行の『信濃・松本平の民俗と信仰』に、筑摩神社のお船行事とともに紹介されています。大和合のお船は筑摩神社のお船と同様に車輪がなく、担ぐ形式のもので、お船でも古い特徴を残しています。お船の中央には松の木が置かれ、前後に高砂の尉と姥の面をつけた人形が置かれます。この人形と面は、諏訪から神社を勧請したときに分与されたものと伝えられています。

一ノ海と厩所のお船は現在は車輪がついていますが、かつては大和合と同じように担ぐ形式のものでした。厩所のお船は建造年代は不明ですが、お船と船庫ともに昭和2年(1927)に改築したことが、庫内の奉鎮札ほうちんふだに記されています。この時の彫刻師、大工はいずれも村の住人です。二階部分には太鼓があり、曳き回しの際にはここでお囃子はやしが奏されます。このお船は昭和35年(1960)に改修が行われ、車輪が付けられました。

一ノ海には船庫はなく、お船は部材ごとに分解され氏子が保管していましたが、今は倉庫にまとめて保管しています。しかし、氏子が少なく組立てに手間がかかるため、現在では通常はお船を出していません。

大和合神社の例大祭は4月29日に行われています。大和合では、例大祭前日の4月28日に神社の境内でお船が組立てられ、29日の朝に人形などの飾付けが行われます。飾付けが終ったお船は、拝殿の前で厩所のお船が来るのを待ちます。

厩所では、29日の早朝に集落の東側にある船蔵からお船が出され、組立てと飾付けが行われます。飾り付けが終ると、お囃子を奏でる小学生がお船の2階に乗り、笛や太鼓の音とともに氏子たちの手によって神社への坂道を曳かれていきます。

厩所のお船が神社に到着すると、大和合のお船の出迎えを受け、大和合と厩所の青



宮原神社のお船



大和合のお船



厩所のお船



一ノ海のお船

年総代が挨拶を交わす儀礼が行われます。この時に、境内をお船を曳き回す回数が決められます。二艘のお船は拝殿前で神官のお祓いを受け、お船の曳回しが行われます。お船の曳き回しの回数は、かつては3回でしたが、近年は1回で行われます。厩所のお船が神楽殿を1周し、境内の出口に向かう所で待機し、その後、大和合のお船が神楽殿を半周して厩所のお船と向かい合うように置かれます。それぞれの青年総代による別れの挨拶が行われ、厩所のお船は集落へと向かい、祭礼が終了します。

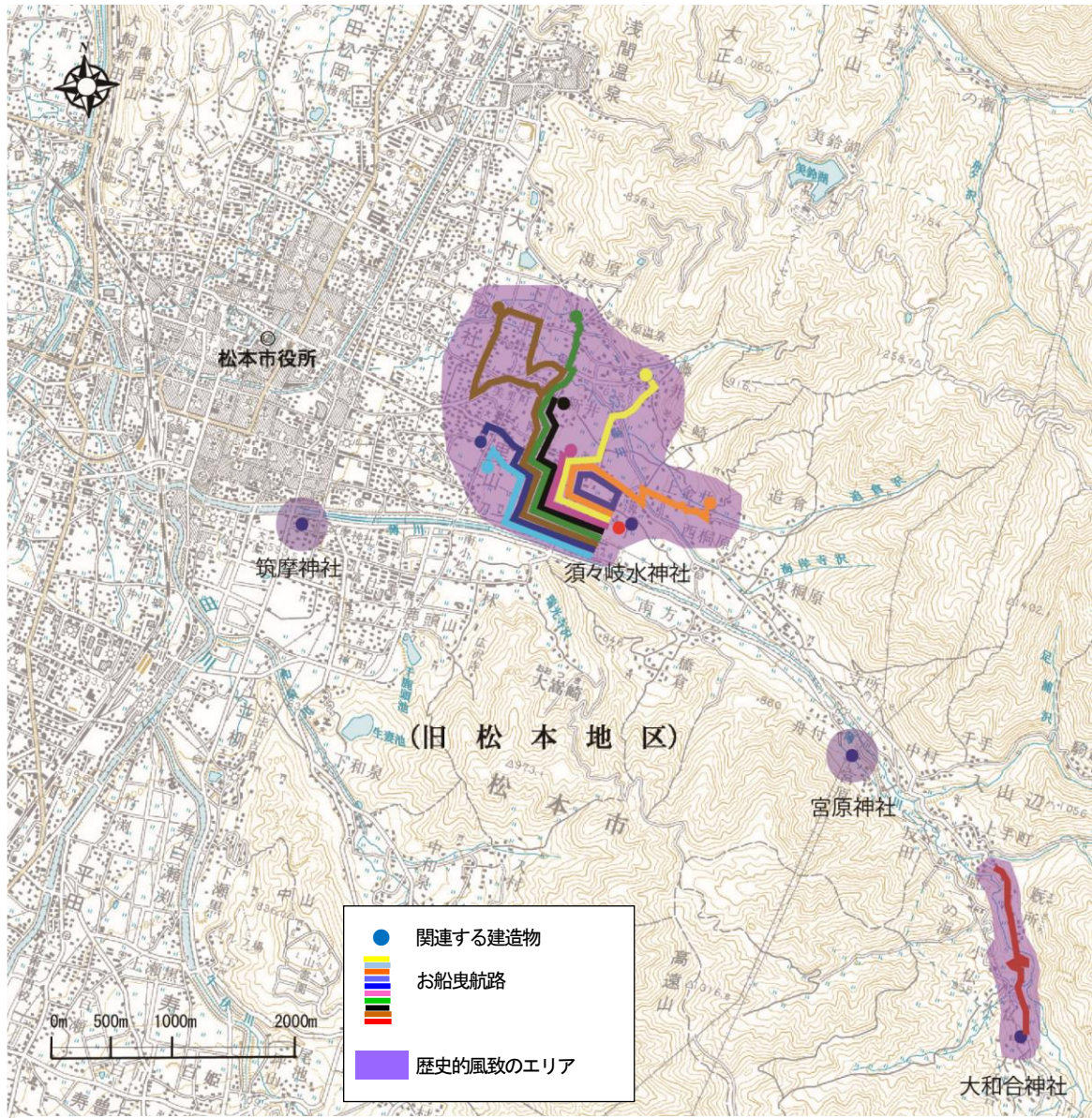
須々岐水神社、宮原神社、大和合神社の3社はいずれも諏訪の建御名方神を主祭神とする神社であり、大和合神社のお船は、舳艫の幕に諏訪大社の梶の葉の神紋が鮮やかです。

エ まとめ

お船祭りの船は、諏訪大社に倣い、神霊が村内を訪れるための乗物として作られたと考えられます。残雪の北アルプスを映す水田の中を行くお船は実に華麗で、周囲の田畑や古くからの集落の景色に溶け込み、歴史的風致を形成しています。この地区ではお船祭りが終わると、田植えの本格的な季節となり、周辺の水田では一斉に田植えが始まります。



残雪を残した北アルプスを映す水田の中を行くお船



歴史的風致のエリア